

2014 年度活動報告

組織強化の取り組み

今年度は会員が 2 名増え、現在会員数は 23 名となった。新入会員はいずれも 30 歳代であり、30 代会員は合計 5 名となり、組織の若返りがはかられている。また、設立総会后に新たに参加したメンバーは 3/4 となった。一方、昨年度の新規会員数からみると増加傾向は鈍化しており、2014 年度の会員の獲得目標である 7 名には及んでいない。また、1 名が故人となった。

現在のメンバー構成は、30 代が 5 名、40 代が 4 名、50 代が 2 名、60 代以上が 12 名であり、依然、50 代までが過半数を占めている。昨年の総会においても総括したことであるが、河北潟湖沼研究所が若手のメンバーが中心となる新たな段階に入ったことが指摘できる。しかし、新しい若いメンバーは、やる気、能力とも優れているが、まだまだ経験不足のため、数年程度の期間を見越して組織構築の方針を持つ必要がある。また、現在でも 50 代～60 代以上の会員が半数を占めることから、年配者にも引き続き貢献が求められており、次の世代の育成を図りながら、経験を活かした多様な総力の発揮が求められている。

2014 年度に作成した新規会員や事業拡大のための 4 種のパンフレット類については、まだ浸透が弱い。イベントでのつながりを組織強化に活かす視点もまだ強まっていない。

昨年も総括したが、友の会の会員の拡大が遅れており、その位置づけを含めて検討する必要がある。

昨年に引き続き、首都圏諸団体への訪問とエコプロダクツ展等への出展により、全国の多くの団体との交流が進み、グリーンピース・ジャパンと連携した生きもの元気米の予約キャンペーンなど、首都圏の団体との連携が進みつつある。

研究・啓発活動の進展

研究・啓発分野の活動として、河北潟レッドデータブックの普及に取り組むとともに、干拓地の現状調査を実施した。水田の生物相の比較調査を実施した。

河北潟セミナーを 4 回開催した。

2013 年度の助成金研究は、論文の段階である。2014 年度公募に対してはカメ類の個体群の研究について 1 名の応募があり、助成金 10 万円の研究助成を行った。

大崎地区の生きもの調査を実施した。

河北潟総合研究第 17 巻を発刊した。

カーボンオフセットにかかる研究について、共同研究の進展が見られた。潟と砂丘の循環にかかる調査について現地調査を 2 回実施した。しかし全般的には、組織としての研究への活性は低い状態である。

9月1～5日にイタリアペルージャで開催された世界湖沼会議に河北潟湖沼研究所より5名が参加し、2題の口頭発表と2題のポスター発表をおこなった。

地域における協働事業の進展

地域における環境保全と地域振興に係る活動の推進のため、地域を構成する多様な組織、多様な主体との協働を進めてきた。これまで、河北潟自然再生協議会主催の河北潟クリーン作戦、河北潟湖面利用協議会、河北潟自然再生まつりの開催等については例年通りの成果として現れている。「河北潟の水辺を守り隊」とともにチクゴスズメノヒエの除去活動については4回行った。河北潟環境対策期成同盟会からの委託を受け、チクゴスズメノヒエ除去活動のコーディネートと現地活動において自治体との連携を進めることができた。また、チクゴスズメノヒエ堆肥を200個納入し、今後、市町が市民に配布してアンケートを集めることになっている。

事業活動・助成金活動の進展

<アクトビヨンドトラスト助成>

本助成を受けての取り組みとして、2014年度産の生きもの元気米の栽培契約と販売を進め、4軒の農家と栽培契約を交わし合計で1,590kgを全て販売した。2015年度は新たに2軒が加わり、6軒の契約農家とすることとなっている。また契約数量としては、全体で5,100kgの買取りを契約している。既に1,370kgの予約注文を受けた。

<地球環境基金>

「カーボンオフセットの活用を展望した協働による水辺と農地の保全活動の推進」として、協働による水辺保全活動を実践しながら、地域の多様な主体との連携をつくり、活動への参加が利益として還元される仕組みの構築を目指した活動をおこなっている。仕組みの柱として、活動による物質循環、水質浄化に伴うCO₂削減効果をJクレジット制度へ提案し、認証を得ることを目指している。

具体的な活動内容として、市民参加による協働の水辺保全活動、こなん水辺公園での水辺のメンテナンス活動、ヨシ舟づくり、セミナー、外来植物の除去活動、協働による米栽培等をおこなった。

水辺保全活動によるCO₂削減効果等についての調査・研究は、9月にプロジェクトチームを作り、調査を開始した。石川高専より協力を得て、チクゴスズメノヒエが分解時に出すメタンやCO₂の量を実験室内で調査した。また、1月から2月にはカーボン・オフセットやJクレジット制度に関するセミナー等に参加し、情報を収集した。

<こなん水辺公園救援隊>

金沢市から、こなん水辺公園救援隊の活動に対して30万円の助成を受けることができた。これを受けて、月2回のペースで救援隊の活動を継続した。今年度の大きな取り組みとしては、ヨシ舟づくりを10月の河北潟自然再生まつりにおいて実施した。

自主事業について

今年度の特徴として、自主事業の大きな展開が見られた。

<七豊米>

水田 2 枚の栽培を実施し、田植え、生物観察会、稲刈りのイベントを実施した。

<生きもの元気米>

今年度の生きもの元気米は完売したものの、販売利益は、販売にかかる人件費、消耗品等の諸経費を差し引くと赤字計上となった。このため、買取・販売価格の見直しを行い、買取価格の値下げ交渉および販売価格の一部商品の値上げを行うこととした。但し、生きもの元気米の購入者は、安全・安心で類似品に比べ買いやすい価格帯であることに納得している人が多いことから、利益率が低い 10kg 商品についての改訂を中心として、これまでとほぼ同様な価格帯で顧客を増やすことに務める。なお、購入者からは「生きものが死んでしまう田んぼで作られたお米を食べるのは不自然」といった意見や、「子供がいつもの倍ごはんを食べた」などの感想が寄せられ、生きもの元気米の支持層が作られてきている。

生きもの元気米の取り組みは、「国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携事業」に認定、「生物多様性アクション大賞 2014 えらぼう部門」の優秀賞受賞といった外部評価を受けた。

<すずめ野菜>

生産については、昨年の活動において、ビニルハウスが完成したことや、畑全体の開墾をおえたこと、トラクターなど農業機械や道具を準備できたこと、スタッフの増員等により、今年度は春より色々な野菜の生産をはじめることができた。今年度作付けした野菜は、73 品種にのぼる。そのうち 30 種類の品目は、すずめ野菜の畑での生産に適しており、来年度も生産をすすめたい。生産の課題としては、チクゴスズメのヒエ堆肥の生産量をあげること、灌漑用水の利用可能時間に制限があり、とくに冬場は水が不足することや、水やりの労力が大きいので、灌漑設備をととのえること、自家採種の種をつくることなどである。

販売については、今年度のすずめ野菜の売上は、約 45 万円であった。昨年度の 3 倍以上の売上となり、若干の収入が得られるようになった。昨年からの販売先である JA グリーンかほく、A-COOP、内灘道の駅にくわえ、津幡町にあるギャラリー茶房の「甚や倶楽部」で野菜の販売を開始できたこと、積極的にイベントでの販売 PR 活動を実施できたこと、ネットショップでの野菜セットの注文が受けられるようになったことがあげられる。また、今年 1~3 月には「(株)金沢オーガニッククラブ」さんの自然宅配便において、すずめ野菜の販売をおこなった。現在は、野菜の生産が追いついていない状況となっている。

日本最大のクラウドファンディングサービスの「READYFOR」に給水施設をつくるプロジェクトを申請して、支援を募った。支援者募集期間内に、13 名の方から支援をいただくことができ、プロジェクトが成立となった。その後、支援者へのお礼となる引換券分の商品すずめ野菜セット等を発送した。支援金額は、READYFOR への手数料 17% 分を差し引いた金額が 3 月に入金された。

2014年10月25日と26日に開催された、「アースガーデン秋 第10回代々木クラフトフェア」に参加した。国際環境NGOグリーンピース・ジャパンさんより、協力の依頼があり、「ネオニコチノイド系農薬の使用禁止を求めた署名活動」と同時に「生きもの元気米」と「すずめ野菜」の活動PRとして、すずめ野菜では、市販されている野菜との食べ比べイベントをおこなった。

<町家事業>

町家事業の一環として、NPO法人金沢町家研究会が主催するイベント「金澤町家巡遊2014」に参加した。金澤町家巡遊は、金沢の町家をめぐり、見学・講義・展示・飲食などを気軽に楽しみながら、町家やその使い手の魅力を体感できるイベントとして2008年から開催している。今年は、笠市町の町家(紙谷漁網店)が拠点となり展示、ワークショップ、カフェ、当研究所は野菜・米の販売を行った。イベント来場者は1,000人であり、この内野菜・米は100人程度(売上÷600円/人として計算)が購入したとともに、今後もこの場所で販売してほしいとの要望もあった。この理由として平常時は町全体が静かであり商店がなく、高齢者が多く空家が徐々に増えていることが挙げられ、地域の衰退が課題となっている。町家の栄えた時代には、河北潟の漁業が営まれ、振売が市内を回り、町家で生産された漁網を利用するなどの内外の交流が地域の重要な活力となっていたと言える。

<金曜マルシェ>

金沢駅金沢港口(西口)には、金沢市の金沢駅西イベント広場がある。金沢駅西イベント広場は、利用者が少ない現状である。このため、当研究所では河北潟周辺で採れた新鮮な野菜のPRの場として4月から「ゆうぐれ金曜マルシェ」を開催することとした。開催は毎月2回、金曜の夕方であり、週末の食材を買い求めにくる近隣住民やサラリーマンなどを対象とする。

イベント・表彰等

<エコプロダクツ>

12月11~13日に東京ビックサイトで開催されたエコプロダクツ展に出展した。出展内容は、ネオニコフリーエリア拡大の取り組み紹介と生きもの元気米の宣伝販売であった。

ブースに来場された方に、生きもの元気米の取り組みについて説明し、簡単なクイズとアンケートを実施、216名から回答がえられた。売り上げは、三日間合計で116,148円であった。内訳は米が合計103,848円で、野菜は4,100円であった。このほかレッドデータブックやカレンダー等の印刷物の販売により、8,200円を売り上げた。

<生物多様性アクション大賞>

「国連生物多様性の10年日本委員会」(UNDB-J)が主催する生物多様性アクション大賞2014において、「生きもの元気米」の活動で「えらぼう部門」の優秀賞を受賞した。この賞では「たべよう部門」、「ふれよう部門」、「つたえよう部門」、「まもろう部門」、「えらぼう部門」の5部門で「優秀賞」が1団体ずつ選ばれる。この中で「えらぼう部門」は生物多

様性のことを考えて生産・販売された商品等を消費者に提供する活動に送られる。11月30日には東京で行われた授賞式に出席した。5部門の優秀賞受賞者によるプレゼンが行われ、それを受けて「大賞」が決定されたが、大賞の受賞はなかった。表彰状のほか、副賞として賞金5万円とデジタルカメラを受けた。

<日本自然保護大賞>

「公益財団法人日本自然保護協会」(Nacs-J)が主催する日本自然保護大賞・保護実践部門を受賞した。2014年にはじめて開催され、「保護実践部門」、「教育普及部門」、「地域の活力部門」、「東北復興貢献部門」、「企業・団体リーダー部門」、「子ども・学生部門」の6つの部門と、特別賞として「沼田眞賞」があり、各部門で1団体が選ばれる。全国からの応募総数は112件から選ばれた。3月8日には、東京の日比谷コンベンションホールでおこなわれた授賞式に出席した。日本自然保護協会専務理事の吉田正人氏より講評いただき、賞状およびクリスタル楯を授かった。

日常活動について

機関紙「かほくがた」は、2014年度に発行すべき20巻の3-4号が未発行となっており、早期の発行が必要である。機関誌「河北潟総合研究」は第18巻が未発行で、現在のところ編集段階となっている。

ホームページの刷新をおこなうとともに、facebookで積極的に活動の広報をおこなった。

東北被災地支援について

昨年に引き続き、東日本大震災の被災地支援活動として、河北潟の水辺を守り隊の活動において、被災地支援メニューを行えるように当地（福島県南相馬市）と現地との調整の活動を行った。